

氏名(本籍)	す わ じゅんいちろう 諏訪 淳一郎 (神奈川県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第2222号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	A SAILING CANOE AND OTHER SORRY THINGS : ANTHROPOLOGY OF CONTEMPORARY GUITAR BAND MUSIC IN PERI-URBAN MADANG (漕ぎ出すカヌーとその他の哀しい出来事：マダン周辺村落における現代ギター音楽の文化人類学的研究)
主査	筑波大学教授 文学博士 牛島 巖
副査	筑波大学教授 博士(文学) 小野澤 正 喜
副査	筑波大学助教授 D. L. 立川 孝 一
副査	筑波大学教授 増成 隆 士

論文の内容の要旨

本論文は、パプアニューギニアの港湾都市マダン周辺村落のギターバンド音楽を対象にとりあげ、西洋との接触を通じて醸成されてきた音楽文化の生成過程を、音楽人類学の視点から調査研究した論考である。その手法として著者は、①マダンの村民がマダンギター音楽について語るパターン化された言説に着目しこの音楽の言説がどのような概念装置によって生じ、逆にどのような影響を音楽現象に与えるのかを分析する。併行して②マダンの村民がどのように音楽を聴いているのかという問題、つまり種々の音楽状況で養われる聴覚認知の傾向性を分析する。この二点を総合的に考察する作業を通じて、常に新たな様式を生成しているギター音楽の現状を解明することをめざしている。論文は英文で書かれ、序論を含めて8章で構成される。

音楽を一つの出来事として考察することの意義、音文化を説明する神話の分析に依拠した音楽民族誌にかかわる先行研究、そして上記の作業手法を示した序論 Introduction を受けて、第1章 The Construction of Genre は、マダンギター音楽がマダン市周辺村落の人々に根を下ろす過程を論述している。二〇世紀初頭に宣教師による禁止によって伝統的音文化は儀礼性を失い舞踊音楽 (*singsing tumbuna*) として再編された。1950年代にギターとウクレレを用いるストリングバンドが組織され、1970年後半には村落を単位に編成されるバンドが競演できる状況に成長し、地域独自の様式が創立されるに至った。更に1980年代以降は電子楽器を用いるロックバンド形式の「パワーバンド」に姿を変えて、この興行目的の野外コンサート (*six-to six*) が、今日マダン地域では唯一の公共的な娯楽となっている。このような経緯を反映して、地域の生活に強く結びついた音楽に好感をもって語るパターン化した言説が生まれていることを指摘している。

第2章 Madang Music in Practice は、ギター音楽が専門のバンドによって演奏されてきた他の都市部(ラバウルやポートモレスビー)とは対照的に、マダンでは、周辺村落在住の男性によって組織されたバンドによって音楽活動が担われている事実を指摘し、そこにおける音楽生成の諸側面を検討している。マダンにおいて音楽を演奏する集団は同郷人(ワントク関係者)たちのみで構成されてきたが、この伝統は舞踊音楽の時代からギターバンドが電子化された現在まで一貫している。演奏の技能は完全な模倣によって学習され、演奏者としての能力を高めるに及んで、次第に自作の創作に移る。この学習過程は村落を基盤とした人間関係によって支えられている、と

指摘している。

上記の論述を受けて第3章から第5章は、マダンギター音楽の表現様式を具体的に論究する。第3章 *Multilingualism and Song Text* は、共通語のトクピジン、公用語の英語そして各村落の現地語が混在するパワーバンドの歌詞を分析している。歌詞の中で高い割合を占める現地語歌詞は、死語化した舞踏音楽の詩句、親しい人への呼びかけ、トクピジンには翻訳できない村の風景に関わる語彙、さらに哀悼の感情を意味するトクピジンからの借用語 *sore* (または *sori*) 等が多用されている。これらの分析を踏まえて、野外演奏の喧騒のなかで音楽が聴取されるという状況設定の中では、歌詞に込められた情報の細部ではなく、イメージを強く喚起する耳慣れた語群だけが聴取される傾向性が認められる、との解釈を示している。

1980年代後半以降、新たな表現様式として葬儀用のギター歌謡とビブラートを用いた独特の歌唱法が出現した。

第4章 *The sore singsing : Stringband for Christian Funeral* は葬儀や埋葬で歌われたり、親しい死者を偲んで作曲される葬儀用ギター歌謡 (*sore singsing*) の生成を取り上げ、分析している。この歌謡では死者への呼びかけと海に漕ぎ出すカヌーが歌い込まれ、会葬者の号泣を誘う。ギター歌謡は娯楽に過ぎなかったが、哀惜の感情 *sore* がパワーバンド歌謡の中で多くの聴衆を惹きつける過程、つまりギターの音に悲しみを感じる聴取が育まれる中で、挽歌が生成した。換言すれば、死者に対する哀悼の感情を共有させるようなギター音楽の表現力が、娯楽としての音楽を死者を弔う音楽様式に変容された、と論考している。

第5章 *Feeling Madang Stail : Invention of a Vocal Technique* は、マダン地域の固有のスタイルとしてパワーバンドに広まっている歌唱法を分析している。この歌唱法は独特のビブラートによって言語音をデフォルメする技法である。西洋ポップスのビブラート唱法から影響を受けながら、音楽情報が濃縮される部分に集中的に反応する聴衆の聴覚を基盤としつつ、歌唱技術の錬磨によって創出されたものである。他方、村民は、このスタイルを *sore* を強調し深い情動を喚起させる歌唱法であると捉え、さらにこの歌唱法の源泉が葬儀における女性の号泣と舞踏歌謡の節回しにあるとも理解している。この言説は、マダンスタイルが喚起する情動と村落において実感される根源的な生活世界とを接合する作用から生じたものである、とする解釈を示している。

第6章 *Wantok Ideology, Fragment Hearing* は、ここまでの音楽民族詩的記述と分析を総括している。マダン・ギター歌謡の生成に注目すると、それは新たな音楽様式が分化していく (*differentiation*) 過程にあると捉え、以下の2点を指摘する。①現地の住民の語る言説は、パワーバンド歌謡によって喚起される愛着と、バンドの演奏者が村落の住民として音楽活動をしている社会環境とを接合される働きをする概念装置によって生じる。この概念装置を、親類や同胞を意味するピジン語ワントクに因んで、著者はワントク・イデオロギーと抽象している。②現地の住民による音楽聴取の形態に関しては、聴衆は、歌詞テキストの全体の流れにではなく、その中で繰り返し歌われる、強力なイメージ喚起力を持った語句に反応している。著者はこの聴覚の性向を *fragment hearing* (断片聴覚) と名づけている。その上で、現地の住民の聴覚認知に即していえば、親しいものへの愛着の念は *fragment hearing* によって喚起され、音楽による想像世界の構築に貢献している、と考察している。

第7章 *Toward Cultural Process of Music-making* は、本論を総括している。マダンギター音楽の生成は、断片化された呼びかけの刺激に反応する聴覚認知の傾向と、個人の音楽体験を共同体的体験に引き上げ、パターン化した言説を生み出す過程との相互作用である。この相互作用で生み出された新たな言説は、音楽の演奏ヘフィードバックされていき、それを通してさらに新しい音楽様式が生成分化する、と結んでいる。

審査の結果の要旨

今日の音楽民族誌におけるの潮流の一つは、音楽が生成する理論的・文化的文脈を考察する研究であろう。ニューギニアの音楽民族誌も神話の構造や隠喩が文化的脈略に総合される場として音の文化が考察されてきた。しかし、今日のパプアニューギニアでは、従来の音概念は変貌を遂げ、土着の音楽を説明する原理としての神話も衰退し

た。音楽研究にあたっては、もはや閉じた共同体を想定できない状況に至っている。

従来の音楽民族誌が、音楽を静的な構造や実態として捉えようとしていたのに対して、著者は、ギター音楽が常に新しい様式を生成している過程を分析している。手法として、音楽の生成過程は、現地の住民が音楽について語る言説を生み出す構造と音楽状況のなかで養われる聴取能力とが、相互に作用しあっている過程であると捉え直して考察を進めている。このような現地調査に基づく新しい音楽民族誌を提起する積極的姿勢は評価できる。

本論文は、多言語を用いる歌詞、挽歌の生成、独得の歌唱法の創出などの具体的なギター音楽様式の生成についての詳細な分析を踏まえた上で、構造の反復・再演という静的な構造モデルではなく、音楽演奏の聴取が経験世界の根源を想起させ、新たな音楽の言説が生まれ、その言説は音楽演奏にフィードバックされることによって、新しい音楽様式が分化するという螺旋構造モデルを提示している。これは音楽の生成過程を分析する新たな研究方法として評価できる。さらに音楽の情報が正確かつ完全に伝わるとみる認知モデルに代わって、多言語と騒音の言語空間においては、強いイメージ喚起力をもつ語句に反応する聴取の傾向がみられることを指摘し、聴覚認知の問題に切り込んでいること、また、音楽の言説の内容と実際の音楽行動とは必ずしも一致しない事実を手がかりに、言説を生成する文化装置の問題に踏み込んでいることなどは、この分野の研究に大きな刺激を与えるものといえよう。

しかし、今後の課題も残されている。特に第6章における論考の鍵となる「断片聴覚」や「ワントクイデオロギー」などの理論的枠組みをより一層精緻なものにすることが期待される。また、都市部におけるギター音楽の生成過程に関わる調査研究を進めることが望まれる。そうすることで、本論文が一層汎用性を持った理論の構築へと発展することが可能になるからである。

このように、今後の研究に期待すべき面が残されているものの、著者は現地調査で得た知見と共感を論として組み立てる力量を示し、本論文そのものは、ポストコロニアルのギター音楽の生成に関わる新地平を切り開く音楽人類学の研究として、学界に一つの地歩を占めうるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。